

## 生物生産学部新入生オリエンテーション行事

## 楽しんだ新入生

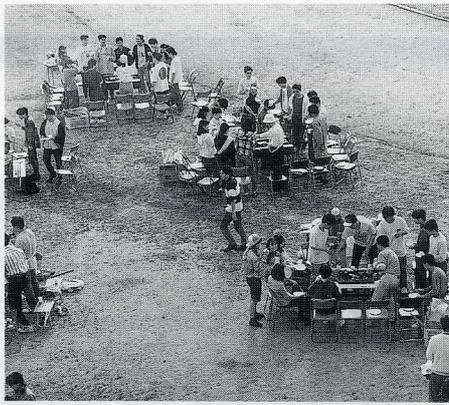
## 一学部行事には限界も

生物生産学部畜産科学講座 岡本敏一

## 一 行事内容

四月二十三日(金)、新入生百三十人は十二時三十分には学部大講義室に班別に集合した。評議員から挨拶、チューターからこの行事の説明を受け、記念撮影の後、バスで総合グラウンドに移動した。そこで二時間、班対抗のドッチボールを楽しんだ後、グラウンドの傍らに用意されたパーベキューに舌鼓を打ち、参加した教官、リーダー、新入生同士が語り合った。この語らひは研修センターで入浴後も深夜まで続けられた。

翌日、新入生は六時に起床、朝食、掃除を済ませ、寝不足の重い足取りでバスに乗り、学部へ移動した。学部では、まずコー



パーベキューに舌鼓を打つ

スごとに展示されている研究室紹介のパネルを見てから、リーダーの案内で各研究室の展示、実験デモなどを見て歩いた。ロビーには各コースがバザ

ーを出し、そこで随時昼食を取った。二時半頃には、研究室訪問を終えた班から大講義室に集合し、リーダー達と「二次会」の打ち合わせなどして散会した。

この時に行ったアンケート(回収率九十三%)によれば、全体として楽しめた新入生は五十%、まあまあ楽しめた者は三十七・五%、この行事を来年も行って欲しいとした新入生は八十五・七%であった。

## 二 準備と反省

全学オリキャンに代わる学部行事についての学部長諮問に対し学部学生委員会は、日時と場所、一泊二日で行うことを答申し、企画・準備を実行委員会に委ねた。実行委員会は学部学生委員七名、05生チューター三名、各コースの三年生二名ずつ六名と専門員からなり、十月から行事当日までに七回の会議を開いた。

経費は新入生と教官の参加費一人三千円と学部校費三十万円で賄った。企画の決定後は、各企画ごとに実行委員の教官と学生がペアになって、学部学生係、工作室技官、研修センター職員

などの協力で準備した。班のリーダー、企画スタッフなど学生組織は学生実行委員が形成し、一週間前にリハーサルを行った。

班に参加した教官は05生チューター、学部学生委員、コースより各二名の教官で計十二名、リーダーは各班に二名ずつ二十四名、スタッフは十九名であった。バザーの手伝いに五十名の学生が、肉の購入と処理に教官と十数名の四年生が、研究室紹介や案内にそれぞれの研究室の教官・学生・院生があたり、学部構成員の過半数が関与する行事となった。

二日後の学生実行委員とリーダーの反省会など、三箇所での反省会が行われた。そこでは、①リーダーと新入生の事前の顔合わせが必要、②新入生を客としてではなく一員として参加させたらよい、③二年生の参加を図り学部的行事としたらよい、④大学が施設、物品などを用意し、学生が企画・準備・実行したらよい、⑤学部間交流の出来る大学一体の行事にしたらどうか、などの意見が出された。

## 三 全学オリキャンに代わる行事になり得たか

計画された企画が完遂され「教官と学生、学生間のコミュニケーションを図り、一年生に学部を紹介する」というこの行事の目的はそれなりに達成される。新入生の満足も得られたようである。しかし全学オリキャンに代わる行事になったとは考えにくい。新入生の

アンケートに「広大全体でのオリキャン」や「他学部との交流」を望む意見があった。学部行事ではこの様な「拡がり」はできない。またこの行事では学生の組織形成から、多くの企画の実行・反省会まで学生主導で行われたが、これらに携わった学生の多くはフェロー経験者であった。この様な学生を毎年輩出する力量は学部行事では持ち得ない。

全学オリキャンではその後も班やフェロー仲間の交わりが続いていて、学部祭や西条祭などの行事ではその人脈が事を運ぶのを見てきている。今年の各学部の同様な行事にあたって、テナントの利用調整がこの人脈でなされたと聞く。同じエネルギーを費やすなら、このように学部を越え、学年間の交わりの出来る全学規模の行事に費したい。来年ならまだ全学オリキャンを復活できるのではないだろうか。再開を切に期待したい。



研究室訪問で院生の説明を聞く